

近代地域文化としての“くびき野ストーン”——頸城野を彩る——

石 塚 正 英*

"Kubikino -Stones" as a modern regional culture

ISHIZUKA Masahide*

キーワード：くびき野ストーン，地域文化，NPO

1. 上越特産の「くびき野ストーン」

この10年ほど、私は郷里の新潟県上越市でNPO法人頸城野郷土資料室を運営し、地元特産の石材（大光寺石・切越石・中山石）をもちいた「くびき野街並みカラー」による都市設計を市民に提案している。この石材はクリーム色を基調とした凝灰岩である。平安時代から石仏や石塔、鳥居、五輪塔の素材として注目されてきた。臼や風呂、井戸側にも使用された。そのほか、雁木や遊歩道の敷石に使用されてきた。滑りにくいからである。そのほか門柱や車道の仕切り石にも似合う。よそからクルマで来る訪問客は、上越地区にさしかかるや、柔かな雰囲気の下に、そこはかとなく安堵を覚えるであろう。上越地方＝くびき野で採取された岩石を私は「頸城野ストーン」と名付け、市民に幅広く知ってもらい、雁木の敷石として再利用する、新幹線駅の内外装に活用する等の提案をしてきた。

2009年11月21日、上越市の春日謙信交流館で「市民景観セミナー～発見！ 市民みんなの宝物」が開催されたときのことである。会場で私は、上越特産の石材（大光寺石・切越石・中山石）をもちいた「くびき野街並みカラー」による都市設計の提案をした。そのような発想は建築家の隅研吾氏も共有している。「地元産の石や木を使えば、自然と環境になじみ、土地の人々との関係も良くなる。完成後も風化するにつれ周囲に同化していきます」（毎日

新聞 2009年12月2日朝刊 21面）。同じことをセーラ・マリ・カミングス氏も主張し実践している。セーラ氏は長野県小布施町の造り酒屋「榎一市村酒造場」のアスファルトをはがして敷石にかえた（高田世界館での講演から、2009年12月6日）。アスファルトでは、中の鉄筋が錆びて数十年で劣化するコンクリートや地面の下を廃墟にするからである。

以下、本論において私は、昔からの地元産石材を再利用して、近代地域文化としての“くびき野ストーン”、頸城野を彩る郷土文化遺産を活性化するプランを説明しようと思う。まずは“くびき野ストーン”を説明したい。

2. 凝灰岩3兄弟“くびき野ストーン”

“くびき野ストーン”とは、新潟県上越地方に産出する特産の石材（凝灰岩）およびそれをもちいた石造物の総称。大光寺石・中山石・切越石をさす。採石場はいずれも閉鎖されて久しいのだが、以下に採石場跡を列記しよう。（写真①、写真②、写真③は2009年秋撮影）

大光寺石（だいこうじいし）——①東山（三和区大東字大峯、写真①参照）、②西山（三和区大東字京塚、写真②参照）、③桑曾根（三和区桑曾根布附）。

中山石（なかやまいし）——上越市柿崎区上中山 通称「石山」。

切越石（きりこしいし）——上越市安塚区切越（切越集落附近を流れる朴ノ木川沿いの岸壁、写真③参照）。

*理工学部情報システムデザイン学系教授 Professor, Division of Information System Design, School of Science and Engineering



写真①



写真②



写真③

以上の3種を、NPO法人頸城野郷土資料室が2009年度に一括して調査したのを機に、同資料室によって総称“くびき野ストーン”が定められた。

(1) 大光寺石

凝灰岩の石材。古くから大光寺の里を切り石の里と地域の人びとは呼んだ。石をもって名産とした。今日のようにセメントやアスファルトが普及しなかった頃の大光寺石は頸城平野になくてはならない貴重な産物であった。上越市の戸野目から四辻沖を番町に向かって歩くと、東の山すそに白い山肌がよく見えたとき、古くは話す。あれは大光寺石の石切場で、海を渡る船の目印になるものだと言われていたときも話す。それはもう古い時代の話になってしまった。大光寺石は色白く石質はあらく柔らかく光沢はない。古寺、神社の鳥居、人家の礎石、土蔵の礎

石、古石橋、敷石、墓石、手洗石、石風呂など、広く多方面に利用された切石は、三和区（旧上杉村）から頸城平野一帯の生活・文化に大きな役割を果たしてきた。石工も沢山集まり市場も開かれ、栄えた時代が長く続いた。だが、科学の伸展と文化の変遷に押されて、この大光寺石は今の世代の人びとに忘れ去られようとしている。

ただし、現在もなお、神社・寺院において今も重要な役目をにない、歴然とその姿を伝え、ここに大光寺石ありと、胸を張っている石造物がある。その代表的なものを上げると石の鳥居があり、何十段も続く石段がある。石灯籠もある。「天保一四年三月」の銘のある風巻神社の第一の大鳥居、その石工は今保の源宗定である。第2の鳥居は延宝六年九月の建立である。この運搬には大そりが使用された。風巻神社には2台あって、大東にあった大そりは三和区の資料館に安置されている。当時の運搬の大道具であった。風巻神社、五十君神社、山高津の諏訪神社の石段は大光寺石である。神域に連なる荘厳さを加えている。浦川原八坂神社の石段は今でもみごとなままである。三和区外では戸野目の小柳邸の雁木下に昔のままの状態で大光寺石を敷きつめた歩道が残されている。石の大きさは一定である。三和区周辺の松縄邸には大光寺石の塀が残されている。頸城区の百間町の山田邸の塀もみることができる。

(2) 中山石（なかやまいし）

柿崎区上中山集落に産出する白色凝灰岩。地元で

は白石しらishiとも呼ぶ。柔らかく加工しやすいため、すでに中世の板碑や五輪塔の石材として使用された。板碑では東横山の板碑群、五輪塔では米山寺薬王寺跡のものが知られる。また岩野の光宗寺境内には多数の五輪塔とともに二基の板碑が確認できる。なお、柏崎市立博物館所蔵の縄文期の石棒（陽石）にも白色凝灰岩が使用され、その特徴から中山石の可能性が高い。この他、近世期造立の石仏をはじめ、墓石や石鳥居など様々な石造物の素材ともなった。また多孔質のため火に強く、湿気を呼ばないことから、家屋の土台石（礎石）や囲炉裏の縁石、石蔵の素材など、近年まで幅広く利用された（『柿崎町史通史編』）。その流通範囲は周辺の柏崎市や刈羽郡、上越市域に及ぶ。1960年代からセメントやコンクリー

ト製品が普及し、中山石の切り出しや生産は急速に衰えた。当時の石切り場跡は、上中山集落の神社裏にあり、当時は発破で岩を崩した後、カケヤで大割りし、ノミ・チョウナなどで、厚さ六、七寸程度の石材に仕上げた。うち長さ一尺ほどのものを駒石、比較的長いものを敷石として出荷したという。

(3) 切越石（きりこしいし）

上越市安塚区大字切越に産出する凝灰岩の石材。同地区は安塚区と牧区との境界地点にある峠の手前に位置する。慶長二年の『越後国郡絵図』には「桐越」とあるが、現在は「切越」と呼ばれる。そのような地名変更は、「この峠を切り開いて越えた所」に起因すると考えたい。この集落の東方に長倉山（ながくらやま、標高六一〇メートル）が迫る。この山麓から南部の山塊を深く穿って朴ノ木川が流れ下っている。この山塊は凝灰岩であり緑色をしている。中腹には地層の露頭も見られる。ここの凝灰岩は水分を含み、柔らかくて加工しやすく火に強いので、昔から石材に利用されてきた、大正四年地元に生まれた松苗一正氏は「子どもの頃、石切場の発破（はっぱ）の音をよく聞いた」と証言する。生活用具としては敷石、かまど、囲炉裏の縁、井戸側、土台石に利用された。石造物としては墓石、神明社の石灯籠、石仏などに用いられた。大正末年まで地元の石工池田彦右衛門が職人を使って営業していた。現在、切越石の名は安塚区にもほとんど知られていない。

3. フィールド調査とその結果報告

昔からの地元産石材を再利用して、近代地域文化としての“くびき野ストーン”、頸城野を彩る郷土文化遺産を活性化するプランを実現するため、NPO 法人頸城野郷土資料室は、大光寺石文化調査団を結成した。そして、2009年6月14日に、NPO 事務所で大光寺石文化調査団第1回会議を開催した。その議事メモ（作成：石塚正英）を以下に添付する。

[日時・場所]2009年6月12日、NPO法人頸城野郷土資料室事務所

[出席者]秦繁治、大坪晃、佐藤幸雄、久米満、佐藤

正清、高野恒男、高野雄介、石塚正英。

[配布資料]関係地図、関係写真、関係文書（『三和の大光寺石』『大光寺石を活用した三和村の石造文化』ほか）。

[協議事項]

- ① 大光寺石文化調査に関する調査団結成。团长：大坪晃。副团长：佐藤幸雄。顧問：秦繁治。調査員：植木宏、久米満、佐藤正清、高野恒男、石塚正英、門田春雄、渡邊三四一、小松光衛。事務局：高野雄介。なお、調査員については、申し出があれば随時受け入れる。
- ② 調査方針の設定。第一に、三和区内にある凝灰岩石切り場（多能、桑曾根字布ほか）を調査する。と同時に、過去に行なわれた三和村内石造物悉皆調査のデータから必要部分を抜き出す。新たに、三和区の外部における大光寺石分布状況を調査し、記録を作成する。あわせて、近隣の凝灰岩石造物（中山石ほか）の調査を行なう。以上を、本調査団の主要な任務とする。
- ③ 上記のうち、悉皆調査記録からの必要部分の抽出（石塚）、および三和区外の分布状況の確認（各自）について、7月末日までに作業をすませ、事務局に報告する。それをまっけて、次回の会議日程を決定する。
- ④ その他 なし

4. 地域産業から文化活動への重点移動

昔からの地元産石材を再利用して、近代地域文化としての“くびき野ストーン”、頸城野を彩る郷土文化遺産を活性化するプランを実現することを視野に入れて、「くびき野ヘリテージ」と称するNPO独自の文化財認定制度を設立した。これを運営するに当たって心がけている点は、第一に地域住民の目線からみた郷土遺産・文化財に意味を持たせることである。専門研究者が認定する学術的価値のほかに、地域住民が生活上で実感する生活文化的価値に重きをおきたいのである。「くびき野ヘリテージ」を介してくびき野文化の特徴・個性を学び知る人は、郷土における就労や生活において明日からの目的意識が明確になる、そのような郷土人の育成、これが本制度創設の目的なのである。

そのヘリテージ第1号に、2010年8月1日、柿崎区坂田新田 764 上野勇人氏所有の中山石製石蔵を選定した（写真④参照）。



写真④

これは、柿崎区上中山 1364 の石工伴内吉十郎が 1958 年につくった中山石による石蔵である。父であり師匠であった清吉の指導を受けたと思われる。依頼主は柿崎区坂田新田 764 の上野勇。翌 59 年、清吉が亡くなる。その翌 60 年、吉十郎は柿崎区上直海 1266 の田中三郎の依頼により、同じく中山石による石蔵をつくった。その時は棟梁滝沢建事、石工棚岡正七とともにあった。その後、吉十郎は石工を廃業した。以上の事情を、吉十郎の子である正男（現当主）、上野勇の子である勇人氏（現当主）、田中三郎の子である百合子氏（現当主）から取材する。2004 年中越地震に際して、近隣の土蔵は崩れても中山石製石蔵は今日に残った。ほか、柿崎区馬生面に 1 棟の石蔵（1930 年築、依頼主：相沢善平、棟梁：北井正一郎、石工は不明）が現存する。善平の孫である富夫氏（現当主）から取材する。

中山石は柿崎区の地元（上中山）では白石（しらいし）とも呼ぶ。柔らかく加工しやすいため、すでに中世の板碑や五輪塔の石材として使用された。多孔質のため火に強く、湿気を呼ばないことから、家屋の土台石（礎石）や囲炉裏の縁石、石蔵の素材など、近年まで幅広く利用された。鉄筋が使用される前は、石材の上下間に四角の継手（櫓材）を差し込んで積み上げた。大光寺石（三和区）、切越石（安塚区）と並んで、中頸城～東頸城を貫く同一の凝灰岩層に産出する 3 兄弟で、「くびき野ストーン」の一つである。

そのほか、NPO 法人頸城野郷土資料室が 2009 年度に一括して調査したのを機に、妙高市（旧新井

市）特産の千草石（安山岩）を加えて、上越市立城北中学校校庭に、以下の要領で「くびき野ストーン・ミニパーク」を構成することにした（写真⑤参照）。



写真⑤

展示ストーン種別

- ・大光寺石（写真左前）：縁石、護岸積石
- ・切越石（写真右前）：柱の礎石、自然石
- ・中山石（写真左奥）：灯籠
- ・千草石（写真右奥）：展示パークのための標本

以下に「千草石」の説明を載せる。：妙高市（旧新井市）特産の安山岩。もともと安山岩は節理が発達し採石に適しており、色合いが美しく耐火性もあるので日本各地で記念碑、墓標などさまざまな石材として利用される。頸城地方では、南葉山東側斜面に産出し、その周辺へと採石場が拡大した。丸石の状態で採石される。表面に「かわ」と称する薄皮（1～3 センチ）の石層があり、本来の千草石はそれに包まれている。表皮の部分を除き安山岩の本体を磨くと美しい若草色が鮮明になる。その後時がたつにつれ薄茶色、いわゆる千草色（あさぎ色、もえぎ色）に変わる。上越市の船見公園内には歌人の与謝野晶子が直江津で詠んだ歌の歌碑を設置したが、歌碑は高さ 145 センチ、幅 80 センチの千草石で、歌の部分は御影石でできている。

こうして“くびき野ストーン”を市民に紹介する運動は着実に成果を達成しつつある。これを推進するに当たって心がけている点は、第一に地域住民の目線からみた郷土遺産・文化財に意味を持たせることである。専門研究者が認定する学術的価値のほかに、地域住民が生活上で実感する生活文化的価値に重きをおきたいのである。使って意義の深まる伝統文化である。